●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 11-11

子どもと家庭学習

目次

子ども研究ノート（その10）　成績という亡霊にとりつかれた子どもたち …… 2

調査レポート　子どもと家庭学習

要　約 …… 8

はじめに …… 12

1．放課後の学習状況

- ●家庭学習の様子 …… 13
- ●両親の対応 …… 16
- ●勉強に対する意識 …… 18
- ●学習塾に通う子ども …… 21
- ●中学受験 …… 24
- ●子どもたちの体調 …… 25

2．校区の特性と家庭学習の状況

- ●家庭での勉強の様子 …… 27
- ●学習塾・受験と子どもの体 …… 31

3．過教育状況下の子どもたち

- ●通塾している子・していない子 …… 35
- ●中学受験の影響 …… 39
- ●成績の良し悪しと家庭学習 …… 47

まとめに代えて …… 52

資料1　調査票見本 …… 53

資料2　基礎集計表 …… 62

資料3　調査票見本および集計結果（学校用） …… 69

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

子ども研究ノート（その10）

成績という亡霊にとりつかれた子どもたち

静岡大学教授
深谷昌志

●外国の子は疲れているのか

子どもたちが疲れているといわれる。たしかに、子どもを対象に調査を行ってみると、そうした疲労感が浮かび上がってくる。

本号でもそうしたデータがでてくるが、小学4～6年生を対象としたアンケート調査でも、「朝なかなか起きられない」子が「とても」の19%に「少し」の54%を加えると73%、そして、「小さなケガをしやすい」子は、「とても」の26%を含めて74%に達する。また、「疲れやすい」と自覚している子は「とても」17%、「少し」45%で、両者を合わせると62%と、6割を超える。

これまで、疲れを知らずに走り回るのが子どもらしさだといわれてきた。そうした見方からすると、疲れている子どもたちはそれだけで子どもらしさに欠ける感じがする。そしてたしかに、朝起きても食欲がない、体をちょっと動かすと疲れる、あるいは、車に酔いやすい。風邪をひきやすくなおりにくいなど、かつての子どもをイメージに置くと考えられないくらいにひよわな子どもたちを見聞きする。

日本にいると、そうした疲れた子どもの姿に慣れてしまってはいるが、諸外国を旅すると、子どもをとりまく環境は決して恵まれていないのに、元気な子どもたちに出会うことが多い。一昨年、国際比較調査を行うためにバンコクに滞在した。NIESの5番目のエリアになろうとしているだけあって、バンコクは活気にあふれていた。それでも、町中にはフロンタイなどの大きなスラム街があり、町はずれに水上生活をしている人たちの集落が広がっている。

アジアやアフリカの子というと、ストリート・チルドレンを思いおこす。マニラでも、空港からホテルへ着く間にもさまざまな形で働いている子どもたちに出会った。多くのアジアの町がそうであるように、小学校は午前・午後・夜間の3部制で、夜間でも学校へ通える子はしあわせに属する。学校へ行けない子が少なくないからである。

そうした子どもたちを見ていると、せめて子ども時代は何に煩わされることもなく、子

どもとしての時をもてるようにしたいと思う。チルドレンズ・ライツ刊行委員会編『チルドレンズ・ライツ』（日本評論社、1989年）やNHK取材班『いま地球の子供たちは』（角川書店、1991年）など、このところ貧しさのなかで成長している子どもたちについての優れた紹介書が出版されている。そうした本で描かれているとおりに、現在でも、地球上の多くの地域で子どもたちが幼いころから貧しさに直面し、ストリート・チルドレンとしての時を過ごしている。しかし、奇妙なことというべきか、そうした子どもたちに出会うと、バイタリティーにあふれ、十分に子どもらしい表情をしている。

●離婚が投げかける影

一昨年はバンコクのほかにも、オークランド（ニュージーランド）やロスへ調査に出かけた。もちろん、こうした地域にはストリート・チルドレンはまれだが、それでも、ダウンタウンのホームレスのなかにかなりの子どもたちを見かける。ニューヨークでもセントラル・パークより北のハーレムやその隣のブロンクス地域には学校へ行っていない子どもの姿があった。

日本では朝起きて学校へ行くのがあたり前になっているが、地球規模でとらえたとき、通学できる子は少数の恵まれた子どもたちに入る。そうした感慨はともあれ、ロスやオークランドの子どもたちで印象的だったのは親たちの離婚が子どもの心に影を投げかけている事実だった。調査に協力してもらった小学校のうち、低い学校で3割、高い学校だと半数近い子どもが親の離婚を体験していた。もちろん、おとなたちはそれぞれの理由から離婚するのであろうが、子どもは親を選べないし、子どもにとって、親の離婚は生活をする場の喪失を意味する。

こうした離婚の問題に人種の問題が複雑に絡み合って、現代のアメリカの子どもは安住できる場を見いだせないでいる。

日本で封切られているアメリカ映画に人間の絆をテーマとしているものが多い。老いた父と子との交流を主題にした「晩秋」（原名は「親父」Dad）、あるいは、母と娘との葛藤を描いた「ステラ」、そして、移住家族の半世紀をたどった「わが心のボルチモア」、さらに「ドライビング・ミス・デイジー」はその名のとおり、ユダヤ人の貴婦人と彼女の車を運転する黒人との心の交流を扱っていた。もちろん、91年のアカデミー賞をとった「ダンス・ウィズ・ウルブズ」もかつてのインディアン社会では人間的なあたたかみがあったことをモチーフとしている。

そうした地味な映画がアメリカでヒットするくらいに、アメリカでは人と人との絆が結びにくくなっており、その影響は子どもたちに及んでいるのはすでに触れたとおりである。

たしかに多くのアメリカの子はアジアの子のように貧しさに直面していることは少ない。しかし、家庭に安心感をもてず、親たちとの間に人間的な絆を結べないままに成長している。

●学業成績に自信をもてない

これまで触れてきたように、アジアの子どもは貧しさに押しつぶされる形で子どもとしての時をもてず、アメリカの子は親たちのいわばエゴの犠牲になって、おとなへの不信感をつのらせる。何の心配もなしに家庭のなかで時を過ごせるのが子どもの特権と考えるなら、アメリカの子も子どもとしての時をもてないでいるのかもしれない。

こうした諸外国の子どもたちの姿を紹介したのはほかでもない。日本の子どもは、経済的にも恵まれ、そして家庭も安定している。

いわば、子どもとしての時を十分にもてる環境が整っているのに、どうして子どもたちが疲れているのか。それに対し、他の社会の子どもは、それなりに深刻な問題を抱えているのに、少なくとも、子どもたちは生き生きとしている。そうした対比のなかで、客観的に最も恵まれているはずの日本の子どもが、最も疲れ、子どもらしさを失っているように見えるのはどういうわけなのだろうか。

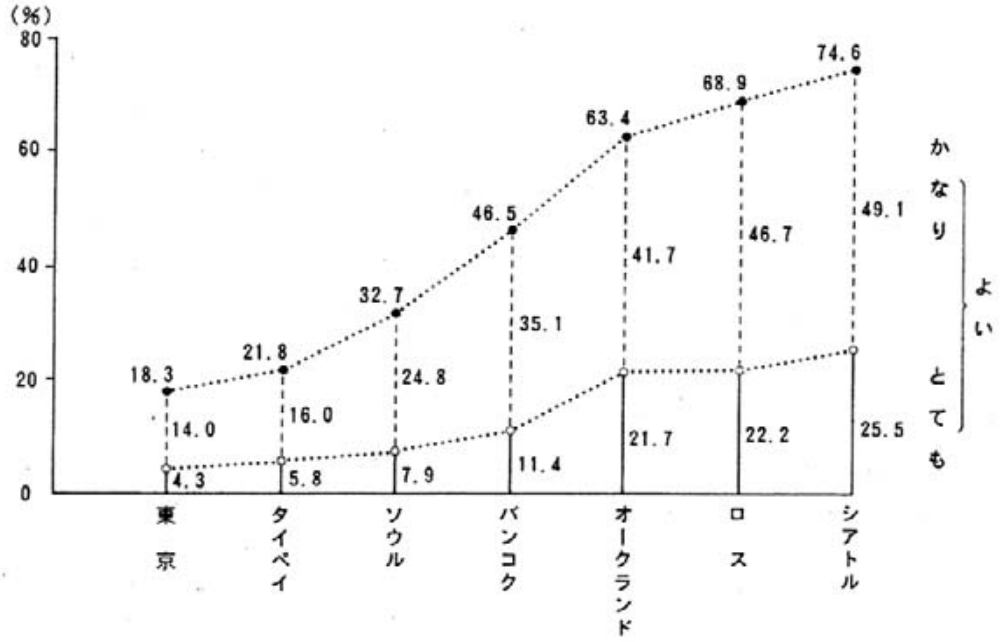
子どもたちがどうして疲れ切っているのか。そうした背景を細かく分析しようとするなら、本の1冊くらいの枚数が必要となろう。そこで、途中の経過を省略して、結論へと導くための重要な中間点ともいうべきひとつのデータを紹介してみよう。

図1は、これまで触れてきた国際比較調査の一部で、このモノグラフでも何度か紹介しているものだが、図中のプロフィールは子どもたちに学業成績についての自己評価を求めた結果を示している。

ロスやシアトルなどのアメリカの子どもたちは、「かなり」に「とても」を加えると7割前後の子が「学業成績はよい」と答えている。それに対し、東京の子が「成績がよい」と思える割合は、「かなり」の14%を含めても18%にすぎない。

この調査の実施にあたって、筆者自身が各学校を訪ね、子どもたちがアンケートへ記入するのを観察した。それだけに、図1の結果に感慨にも似た気持ちを抱く。アメリカの子どもたちはおとなの目には勉強が苦手のように思えても、本人は「成績がよい」と答える。そして、そうした傾向は、オークランドやバンコクの子にも認められる。

図1　成績のよい子の割合



それに対し、東京の子どもは、自分の学力を客観的に見つめ、「ふつう」くらいと思っている子どもが55%に達する。このように、アメリカの子は自分を過大に評価しているが、日本の子は冷静に自分をとらえている。したがって、どちらの子どものほうが成熟しているかとなると意見が分かれる。しかし、子どもらしいのはどちらかとなれば、自分に夢をもっているアメリカの子に軍配をあげざるを得ない。

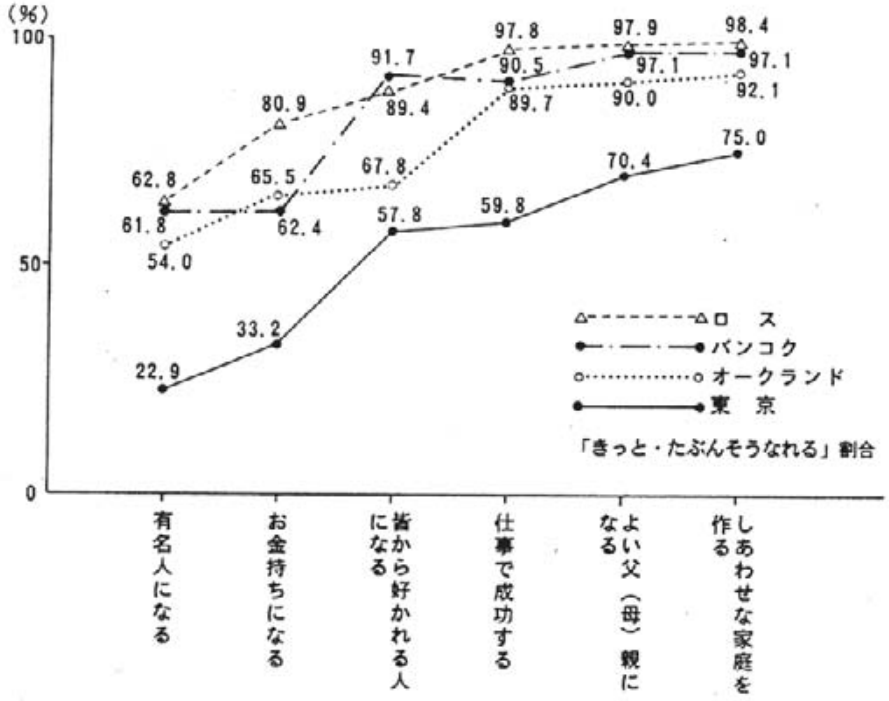
そして、それぞれの地域の子どもたちと面接した印象からすると、学業成績の自己評価とその社会の教育過熱状況との間に密接な関係があるように思える。つきつめていうと、子どもたちが学業成績に自信をもちにくくなる程度に応じて、その社会の教育過熱の状況が増す。したがって、図中の７つの都市のうち、最も教育熱が盛んなのは東京、次いで、タイペイ、そして、ソウル、さらに、バンコクの順位となるであろう。

●成績のよさは打ち出の小槌

それでは、東京の子どもたちはどうして学業成績に自信をもてないのか。それは、東京の子どもたちが、おとなになって、よい仕事についたり社会で活躍するために、有名な高校へ進学し、一流の大学へ入学する必要があると、学業成績のよさのもつ意味を大きく評価しているからであろう。つまり、学業成績のよさは高い学歴を媒介として、すべてのものを手に入れることのできる打ち出の小槌なのだ。それゆえに、少しでもよい成績をとりたいというメカニズムがある。

そう考えるから、子どもたちは学習塾へ通い、そして家庭学習に打ち込み、少しでもよ

図２　将来の見通し



い成績をとろうとする。

子どもたちに、勉強の得意な子がどうして得意なのかを尋ねたところ、バンコクの子の61%、ロスの子の52%が、「もともと頭がよかったから」と答えている。しかし、東京の子でそう思っているのは34%で、ほとんどの子どもは、「先生の話をよく聞き、そして、家庭で予習や復習をしたから成績がよくなった」と思っている。つまり、学業成績のよさは学習努力の産物という見方である。

したがって、明るい未来を約束する成績のよさという打ち出の小槌は、何もしないで手にできるものではなく、見たいテレビを我慢し、眠いのを我慢して勉強することを通して獲得できると、子どもたちは考えている。

日本の子どもたちが成績のよさを打ち出の小槌のように思ってがんばって勉強しているのはいい。しかし、残念ながら、子どもたちは思うような成績をあげることができずに、自分の成績に自信をもてないのは、すでに図1で紹介したとおりである。

学業成績についてのそうした見通しの暗さは、当然のことながら、その他の面にも及んでくる。図2は、図1と同じ調査の結果で、子どもたちに将来についての見通しを尋ねたものだ。

ロスやオークランドの子どもたちは、大きくなって、「しあわせな家庭を作る」や「仕事で成功する」のは「きっと」あるいは「たぶん」可能だろうと思っている。それに対し、東京の子どもたちが将来について明るいイメージを抱けないでいるのは、図中のプロフィールの示すとおりである。

●適性や個性に応じた成長を

そこで、もうひとつの結果をみてほしい。

表1　将来の見通し × 成績

(%)

		よい		ふつう	よくない(B)	B／A
		とても(A)	かなり			
仕事で成功する人	東京	55.6	33.7	18.2	17.3	31.1
	バンコク	40.0	34.6	26.8	18.2	45.5
	ロス	80.0	70.1	64.8	61.5	76.9
	オークランド	76.6	63.2	50.0	67.6	88.3
しあわせな家庭	東京	67.3	55.4	37.4	28.7	42.6
	バンコク	60.0	60.8	55.5	50.0	83.3
	ロス	91.3	87.4	84.8	83.1	91.0
	オークランド	84.5	77.1	75.6	78.8	93.3

「きっとそうなれる」割合

表1は将来の見通しが学業成績によってどういうことになるのかを調べたもので、ロスやオークランドの子どもは学業成績の良し悪しによって、未来の見通しが変わってこない。つまり、成績のよくない子も成績のよい子と同じように、大きくなったら「仕事で成功できるだろう」と思っている。それに対し、東京の子どもたちは、表からも明らかなように、学業成績が下位になるにつれて未来の達成を断念する子どもの割合が増す。

こうみてくると、小学生のころの成績のよさが明るい未来を約束する打ち出の小槌という感覚は日本の子に特有なもので、アメリカやタイの子どもたちには学業成績はそれほどの重みをもたない。成績と関係なく、どの子も明日に希望を抱いている。

井上靖の『あすなろ物語』のように、「明日は檜になろう」と、未来に夢を見られるのが子どもの特権であろう。確率はともあれ、どの子も、何にでもなれる可能性を宿している。そして、他の社会の子どもたちは、現在でも「明日は檜になろう」と思っているのに、日本の子どもたちはなぜか、檜になれそうもないと、挫折感を抱き、無気力化の傾向を強めている。本号でも、学業成績が子どもたちの心を重くしている事実を明らかにしている。しかし、その根が深いことがこうした国際比較のデータからも感じることができる。

いずれにせよ、困ったことに、子どもたちの環境は物質的に恵まれているので、挫折した子どもたちはテレビを見たり、マンガを読んだりして、家にこもったままで放課後の生活を送り、挫折感を癒していく。しかも、そうした生活がずっと続くので、子どもたちは、なおのこと、無気力になる。

しかし、小学生時代の成績のよさはその人の生涯を決定するほどの重さをもつのであろうか。かなりの人たちが大学へ進学し、必ずしも大学卒がよい生活を保証するパスポートになるわけではないのは周知のとおりであろう。特に生涯学習の時代を迎え、いくつになっても新しい情報の獲得が人々に求められている。そうした見方からすると、小学校時代の成績などは長い人生というマラソン・レースのなかのほんのスタート時点のラップにすぎない。さらにいえば、現代のように成熟した情報社会では、それぞれの人が個性を生かして多様な生き方をするのが可能なのである。

音感の優れた人はそれを生かして人生を送ることができるし、色彩感覚に恵まれた人はそれを武器として充実した生活を過ごすことも可能だ。つまり、どの子どもも、その子の個性や適性に応じてその子なりの人生を送れるようになったのに、子どもたちは、一昔前の学歴社会の亡霊にとりつかれている。

そう考えると、かなりの子どもたちが疲れ果てるまで学力競争をくり返し、そして、思ったような成果をあげられないまま挫折していく姿は、なんとも無意味なように思われてくる。

どの子にもその子なりの長所がある。その長所を伸ばしていけば、その子らしい人生を送れるのではないか。その子の個性に対応し、そして、個性を伸ばす。これからの学校は、子どもの個性を認めて育てる場に変わっていく必要があろう。しかし、それにしては、現代の学校は画一的で型にはまり、個性のかけらも認めにくい感じがする。子どもの個性を育てるために、まず学校のあり方そのものの見直しが求められているように思われてならない。

（付記　本稿は同じ題名の小論（「児童心理」1991年6月号）を加筆・補筆したものである。）

調査レポート
子どもと家庭学習
要　約

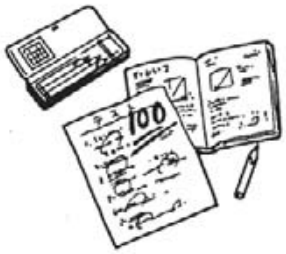
静　岡　大　学　教　授　深谷昌志
杉並区立杉並第六小学校教諭　土橋　稔
横浜市立鳥が丘小学校教諭　戸塚　智
目黒区立不動小学校教諭　矢部　崇
埼玉県立小川高校教諭　三枝恵子

（調査票の作成・分析は小学生ナウ同人全員で行ったが、執筆は上記の者が担当した。）

1．勉強時間

毎日１時間か１時間半くらい勉強をしている。（表５）

2．勉強への気持ち



「ぜったい100点をとりたい」と「とても」思っている子は42%、「勉強をしなくてもよい日があればうれしい」と思っている子は39%を占める。（表９）

3．通塾率

全国調査の結果でも、塾通いをしている子どもの割合は44%と、４割を超えたが、これに「以前行っていたがやめた」の12%を含めると、通塾経験者は56%に達する。（図６）

4．私立中学受験

受験を予定している子は13%（図10）だが、近くに私立中学があったら受けたいと思っている子どもは21%に達する。（図11）

5．子どもたちの体調

「朝、なかなか起きられない」と思っている子は「少し」の47%に「とても」の28%を含めると、75%と4分の3を占める。（図13）

6．地域差との関係

親たちの勉強に対する関心の強さに地域差は認められなかった。（表20、21）

7．塾通いの影響

塾通いをしているかどうかと、子どもの意識との関係については、思っているほどの関係は認められなかった。（表32）

8．私立中学受験の影響

私立中学を受験する子どもの32%は、夜9時すぎに塾から帰り（表39）、11時以降に就寝する子が42%を占める。（表40）

9．将来の達成

未来について、私立中学受験生はやる気に富んだ見通しを抱いている。（表46）

10．体調と受験

私立中学を受験する子は、受験しない子どもより体調の悪さを訴えている。（表47）

11．学業成績と将来の見通し

成績のよい子どもたちのほうが未来に明るい見通しを抱いている。（表53）

12．体調と学業成績

成績の下位層の子どものほうが、「なんとなく疲れやすい」「朝、なかなか起きられない」など、体調の悪さを訴えている。（表54）

〔全体として〕

全国調査を実施した結果でも、通塾している子が44％、私立中学の受験を予定している子が13％など、教育過熱状況が全国に及んでいることが明らかになった。

そうした中で、受験を予定している子どもは受験勉強に疲れる一方、勉強の苦手な子どもも体調の悪さを訴えていた。そうした意味では、子どもたちが、受験に疲れた成績上位層と、勉強に自信を持てずに暗い未来を予感してやる気を喪失している子どもとに両極化している印象を受ける。

〔調査概要〕

1．各地方ごとの調査サンプル

地方	県	調査校数	地方	県	調査校数
北海道	北海道	3校	近畿	滋賀	0校
東北	青森	2校		京都	0校
	岩手	3校		大阪	1校
	宮城	4校		兵庫	1校
	秋田	6校		奈良	3校
	山形	1校		和歌山	2校
	福島	5校	中国	鳥取	4校
関東	茨城	3校		島根	4校
	栃木	1校		岡山	1校
	群馬	4校		広島	1校
	埼玉	3校		山口	3校
	千葉	2校	四国	徳島	0校
	東京	1校		香川	0校
	神奈川	1校		愛媛	1校
中部	新潟	3校		高知	0校
	富山	3校	九州	福岡	0校
	石川	1校		佐賀	1校
	福井	4校		長崎	2校
	山梨	4校		熊本	1校
	長野	2校		大分	1校
	岐阜	1校		宮崎	2校
	静岡	3校		鹿児島	1校
	愛知	3校	沖縄	沖縄	0校
近畿	三重	0枚	合計		92校

＊調査対象は、各都道府県ごとにほぼ50分の1の小学校を無作為に抽出し、調査票サンプルを送り、調査協力を依頼。

2．調査サンプル　　各校の小学校6年生1学級
　　3,034人（男子1,539人、女子1,495人）

3．調査時期　　1991年6月～7月

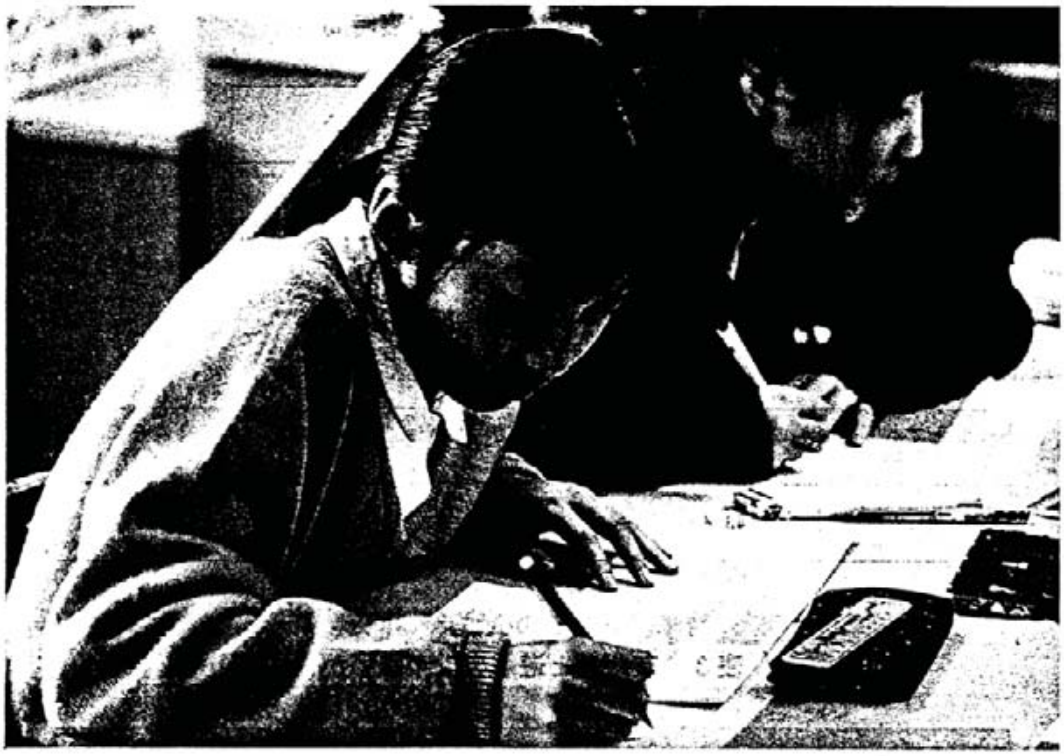
4．調査方法　　学校通しによる質問紙調査

はじめに

最近の日本の子どもたちを考えると、「勉強」ということが子どもたちに重くのしかかっているように思える。マスコミでも、塾や中学受験について盛んに取り上げ、教育過熱状況ともいえる現象をつくりだしている感がある。子どもたちをとりまくこれらの風景は、大きな社会問題の１つとなり、現在に至っている。だが、勉強、勉強で追いまくられ、圧迫さえ受けているようなこうした教育過熱の状況は、本当に子どもたちの生活に入り込んでしまったのだろうか。

本調査は、子どもたちの放課後の学習の様子を明らかにしながら、問題に迫ろうとした。また、本調査は、全国調査をすることにより、先に挙げた教育過熱状況が、全国規模の問題として捉えることができるのか、あるいは、一部の地域に限られたものなのかを明らかにし、さらに、子どもたちをとりまく勉強の状況を検証するものである。

1．放課後の学習状況



■ 家庭学習の様子 ||||

まず、子どもたちの１日の生活の様子をたずねた。表１によると、子どもたちは、朝は６時40分に起き、夜は、10時20分に床についている。６年生であっても、10時20分に寝るというのは、いささか夜ふかしの部類に入るように思う。そうした子どもたちは、表２のように、「学校は楽しい」と答えた子が、「とても楽しい」32%、「わりと楽しい」まで含めると、７割以上の子が、学校の楽しさを感じている。しかし逆に、10%弱の子どもは、学校に楽しさを感じていない。表３は、「友だちとの遊び」についてたずねた。「とても楽しい」と答えた子が64%、「わりと楽しい」を合わせて９割以上の子が、楽しく友だちと遊んでいる。こうした生活の中で、子どもたちは学校での勉強以外、放課後にはどのくらい勉強しているのだろうか。

次の図１、図２は、家庭での学習環境をたずねた結果である。自分が家庭で勉強する部屋は、きょうだいと一緒まで含めると86%と高く、また、自分だけの勉強机は、93%の子どもが持っているというように、学習の環境は整えられているようだ。

それでは実際に、どのくらい家庭で勉強しているのだろう。ふだんの日（土・日曜日を除く）の家庭学習は、表４のように、「ほとんど毎日勉強する」という子が68%に達する。そして、その勉強時間は、１日平均すると１時間～１時間半程度であることも表５より明らかである。子どもたちはかなりがんばって、家庭でも勉強しているという様子がうかんでくる。

表１　毎日の起床時間と就寝時間

毎朝、起きる時間	平均６時41分
夜、寝る時間	平均10時17分

表２　学校が楽しいか

（%）

とても楽しい	わりと楽しい	どちらでもない	あまり楽しくない	ぜんぜん楽しくない
31.7	43.4	16.1	5.8	3.0

表３　友だちと遊ぶのは楽しいか

（%）

とても楽しい	わりと楽しい	どちらでもない	あまり楽しくない	ぜんぜん楽しくない
64.0	29.2	4.7	1.4	0.7

図１　勉強部屋の有無

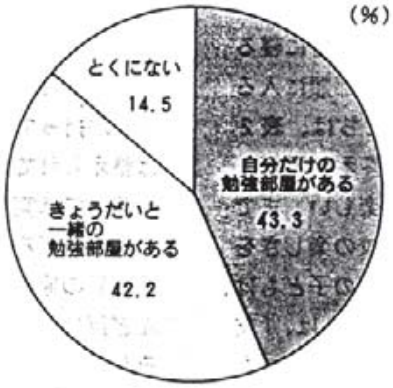


図2　勉強机の有無

(%)

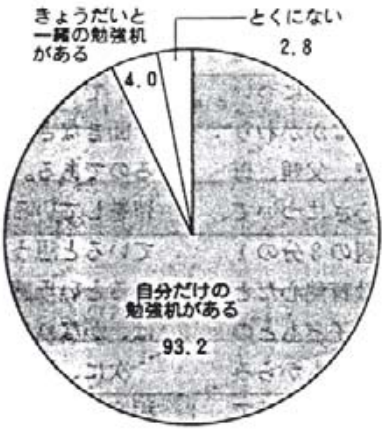


表4　ふだんの日の家庭学習

(%)

ほとんど しない	1週間に 1～2日 くらいする	1週間に 3～4日 くらいする	ほとんど 毎日する
4.0	9.6	18.4	68.0

表5　1日の勉強時間

(%)

ほとんど しない	30分 以下	30分 くらい	1時間 くらい	1時間 半くらい	2時間 くらい	2時間 半くらい	3時間 くらい	3時間 以上
1.8	6.1	16.6	29.4	19.8	11.6	7.1	3.9	3.7

■ 両親の対応 IIII

このような子どもたちの家庭での勉強を見守る父親、母親は、子どもたちの勉強について、どの程度、そして、どのようなかかわり方をしているのだろうか。図3で、父親、母親、それぞれの教育に対する熱心さについて、子どもたちにたずねた結果、父親の3分の1が、また、母親の2分の1が、教育熱心だと子どもから思われているようだ。子どもとの接触時間の長い母親のほうが、子どもからみれば、教育熱心ということになるのは当然であろう。

その母親は、具体的に、どんな対応をしているのか。「母親から勉強のことについてよく言われること」を子どもたちにたずねてみた。それが図4である。子どもたちは母親から、「宿題をしたの」ときかれるのがトップで、「ときどき言われる」子まで含めると、実に72%にまでのぼる。その次に言われていることは、「テレビを見ないで勉強しなさい」で、61%となり、さらに「先生の話をよく聞きなさい」と言われている子が58%もいるのである。このような中で、日々の家庭学習をしている子どもたちの姿がうかびあがっていると思う。親から無理に勉強させられているという感じではないが、勉強している量は、かなり多いと思われる。

次に、両親の家庭学習に対するかかわりの程度をみると、表6より、2割近くの親が、子どもの勉強を週に何回か見てやっていることがわかる。また、テストを親に見せるかという質問に対しては、テストを「だいたい見せる」まで含めて76%と、多くの親は子どものテストの結果に目を通して、子どもたちを励ましているようだ（表7）。いずれにしても、どこの家庭でも、子どもの勉強に対しての関心は高いといえよう。

図3　両親の勉強への関心

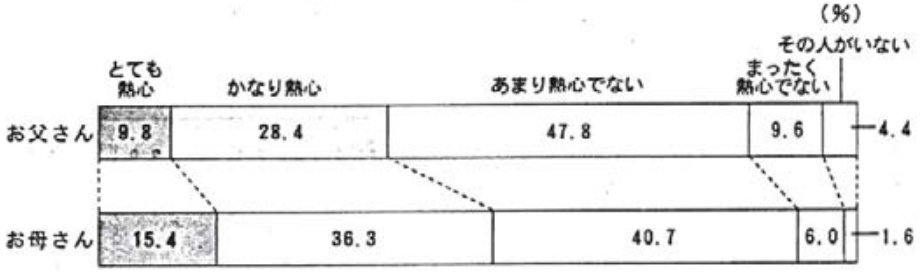


図4　母親からよく言われること

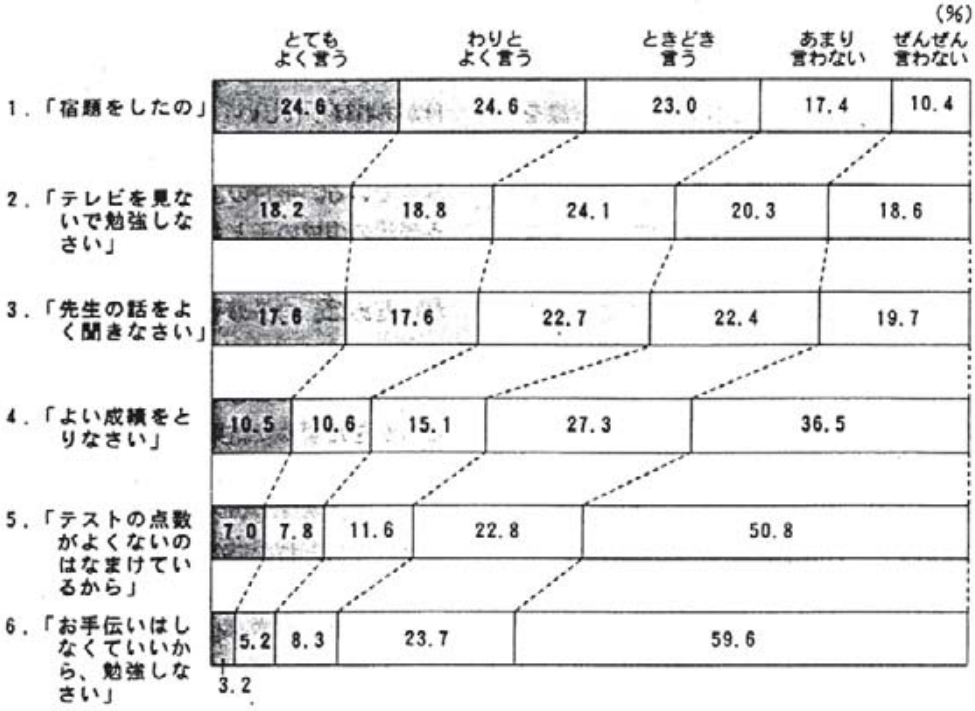


表6　親に勉強を見てもらうことがあるか

(%)

毎日のようにある	週に何回かある	たまにある	ほとんどない
4.5	13.1	55.3	27.1

表7　親にテストを見せるか

(%)

必ず見せる	だいたい見せる	ときどき見せる	あまり見せない	ぜんぜん見せない
46.0	30.2	14.9	6.4	2.5

■ 勉強に対する意識 IIII

ところで、子どもたちはふだん、どんなことを考えながら勉強しているのだろう。ここからは、勉強しているときの様子、意識を探っていこうと思う。

表8は、勉強しているときの様子についてたずねたものである。家庭学習では、「宿題がないときでも他の勉強をする」という子が、「ときどきしている」と答えた子まで含めると62%、同様に、「言われなくても勉強をする」子が69%と、かなり高い割合を示しており、子どもたちが自分からすすんで、家庭学習に取り組んでいる姿が見られる。

次の表9は、勉強に対する意識をたずねたものである。「ぜったい100点をとりたい」や「友だちのテストの点が気になる」といった気持ちの割合が高いのは、先の表8でみたような勉強の様子として具体的に現れてきている。そうした中でも、「勉強をしなくてもよい日があればうれしい」という子どもは、「かなりそう思う」まで含めて67%と、3人に2人の割合でいる。毎日のように勉強しているという現状の中での子どもたちの本音であろうか。

こう考えてくると、勉強をしなくてはならないために、自分のやりたいことを多少はがまんしなくてはならない場合もあるだろう。表10は、どんなことをがまんして勉強しているのかをたずねた結果である。子どもたちががまんしているのは、読みたいマンガの時間をトップにあげている。しかし、ここで注目したいのは、ねむいのをがまんして勉強している子や、ぼんやりしていたいのをがまんして勉強している子が40%近くを占めているこ

表8　勉強しているときの様子

(%)

	よく している	ときどき している	あまり していない	ぜんぜん していない
1．宿題がないときでも家で他の勉強をする	27.4	34.8	22.3	15.5
2．お母さんに「勉強しなさい」と言われなくても勉強をする	27.1	41.9	22.3	8.7
3．テレビやラジオを聞きながら勉強をする	18.7	30.5	22.7	28.1
4．自分で計画をたてて勉強している	12.5	22.9	35.9	28.7
	よく聞く	ときどき聞く	あまり聞かない	ほとんど聞かない
5．わからない問題があったとき、お父さんやお母さんに聞く	32.2	43.9	14.2	9.7
	とても そう	わりと そう	あまり そうでない	ぜんぜん ちがう
6．ふだんは勉強しないが、学校のテストの前にきちんと勉強をする	10.6	37.8	39.0	12.6

とで、こうした子どもたちは、自分の体が休みを必要としているのにもかかわらず勉強する時間が長い。それが子どもたちの体に少なからず影響を与えていることは否定できない事実だろう。

ところで、子どもたちはいろいろなことをがまんしながらも、いったい何のために勉強しているのだろう。ねむいのをがまんしてまで勉強に向かわせているものは、何だろうか。図5をご覧いただきたい。これによると、「将来つきたい仕事につけるように」と考えている子が48%とトップを占め、次いで「将来、幸せな生活を送りたいから」という子が47%というように、自分の将来のことを考えて今は勉強しているという気持ちが強いようだ。

勉強した結果として、成績は必ずついて回るものであるが、子どもたちが自分の成績について自己評価すると、表11のようにまとめられる。子どもたちは、自分自身のことを過小評価しており、自分について、今ひとつ自信を持っていないように思える。「モノグラフ・小学生ナウ」vol.10－9での国際比較による調査で、アメリカをはじめとする諸外国の子どもたちは、7割以上が自分の成績はよいと答えており、本来はそれが子どもの特性であるにもかかわらず、日本の子どもたちにはそれが見られない。教育過熱状況が進めば進むほど、自分の成績が気になり、次第に自信を失いがちになるこの結果は、過去にも多く調査結果で報告されているが、私たちは、それに慣れてしまうのではなく、子どもをとりまく大きな社会問題として考えていかなくてはならないだろう。

成績を各教科別にみると、算数については成績は「下のほう」と考えている子が15%ときわ立って高い。そこで成績による評価を決定づける重要なバロメーターと考え、算数によるクロスデータを本調査の後半に掲載しようと思う。

表9　勉強に対する意識

(%)

	とても そう思う	かなり そう思う	あまり そう思わない	ほとんど そう思わない
1．ぜったい100点をとりたい	41.9	31.4	20.7	6.0
2．勉強をしなくてもよい日があればうれしい	38.5	28.4	24.5	8.6
3．友だちのテストの点が自分よりよいか気になる	25.0	31.2	32.0	11.8
4．勉強ができれば、おとなになって幸せになれる	15.1	23.2	42.7	19.0
5．勉強をするのが好きでない	13.2	32.5	45.1	9.2
6．勉強ができれば、ほしいものを買ってもらえる	6.7	9.2	35.8	48.3
7．学校の勉強がむずかしくてよくわからない	3.9	15.8	59.2	21.1
8．勉強ができれば、少しくらい悪いことをしてもお父さんやお母さんが許してくれる	1.4	2.8	23.0	72.8

表10　勉強しているとき、がまんしていること

（%）

	いつも している	かなり している	あまり していない	まったく していない
1．読みたいマンガをがまんして勉強をする	12.7	24.0	38.3	25.0
2．ねむいのをがまんして勉強をする	11.8	30.5	38.9	18.8
3．ぼんやりしていたいのをがまんして勉強をする	11.8	28.1	38.9	21.2
4．友だちと遊ぶのをがまんして勉強をする	6.4	12.3	40.9	40.4
5．見たいテレビをがまんして勉強をする	5.1	18.8	51.5	24.6

図5　勉強する目的

（%）

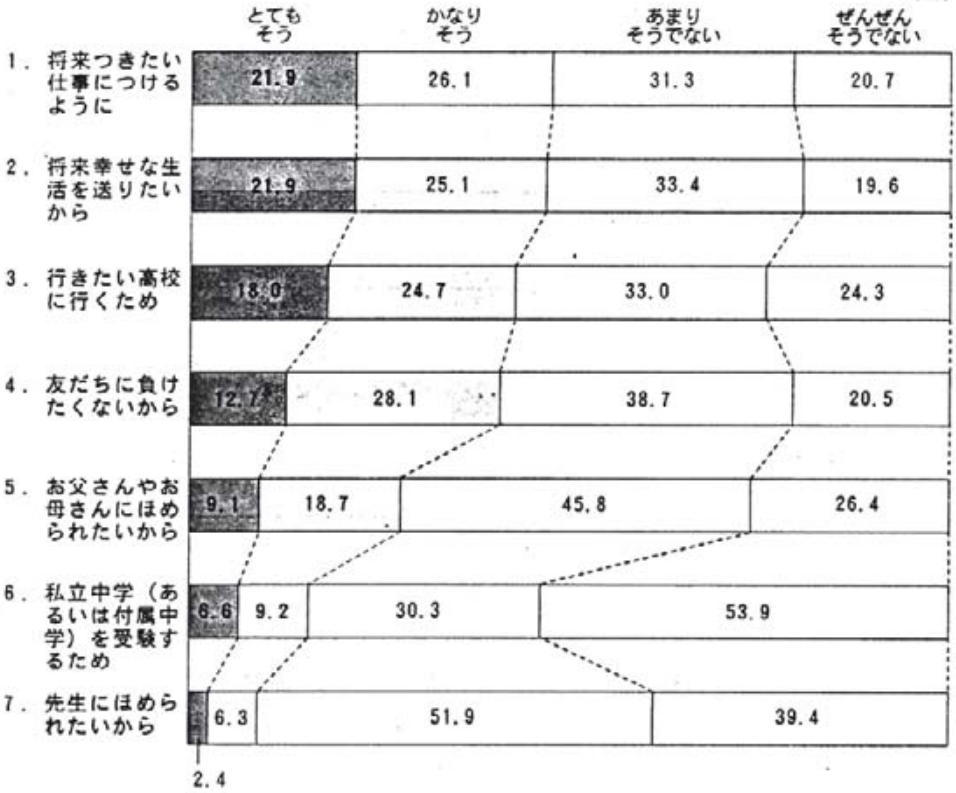


表11 成　績

(%)

	上のほう	中の上	まん中	中の下	下のほう
1．算数	7.3	19.2	37.0	21.5	15.0
2．国語	4.9	18.8	42.4	22.4	11.5
3．理科	5.5	18.5	41.7	22.9	11.4
4．社会	7.1	19.3	38.0	23.9	11.7

■学習塾に通う子ども

放課後の学習の様子を探るのに、学習塾の問題を欠かすことはできない。ここからは、学習塾に関するデータを中心に、それにつながる中学受験、そして子どもに及ぼす影響について考えたいと思う。

まず、子どもたちがどのくらい学習塾に通っているかをたずねた（図6）。現在、学習塾に行っている子と、行っていない（行ったことがない）子は、両者ともほぼ44%。前に行っていた（今は行っていない）子が12%いることから、56%の子どもが学習塾の経験があることになる。学習塾とは違った家庭学習のスタイルとしての通信教育や家庭教師については、図7、図8のようになっている。

さて、学習塾に話をもどすとしよう。子どもたちが、どんな学習塾に通っているかをたずねたものが図9である。学習塾に行っている子どものうち53%は補習塾、32%はドリル中心の塾、26%の子どもは進学塾に通っている。

子どもたちが学習塾に通っている様子をみると、次の表12～表15までにまとめられる。これらの結果によると、家から通える学習塾はだいたい2～3か所で、そこへ月～土曜日までおよそ2回程度通っていることになる。学習塾に行くために家を出る時刻が4時半～5時ごろで、帰宅は7時ごろというのが一般的である。そうなると、先のデータでみたように、ふだんの日、家庭で1時間～1時間半の勉強をしているのなら、この学習塾に行っているという2日間は、学習塾から帰宅後、さらに勉強していることになる。やや、精神的、肉体的に圧力をかけられている感がある。

図6　通塾率

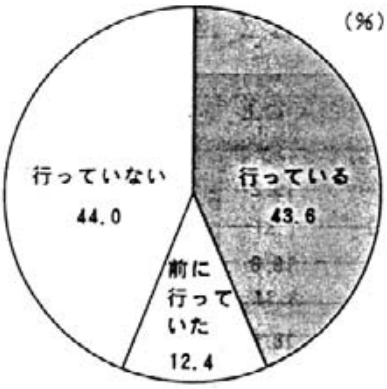


図7　通信教育

図8　家庭教師

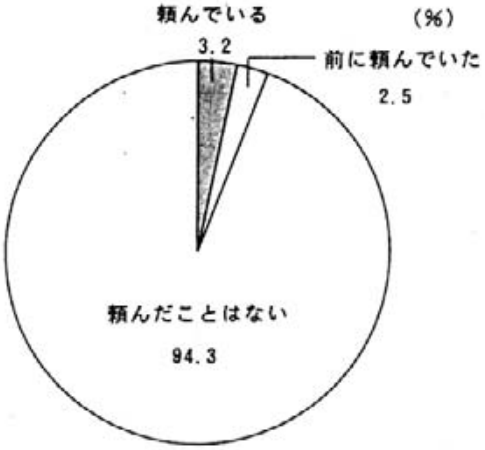


図9　通っている学習塾の種類

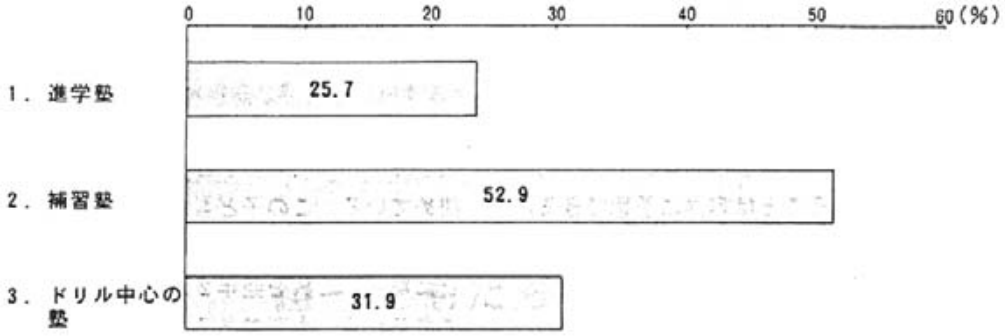


表12　家から通える学習塾の数

(%)

ない	1つ	2～3こ	4～5こ	10こ	10こ以上
12.5	17.1	40.6	24.4	3.3	2.1

表13　月～土曜までに学習塾に行っている回数

(%)

1回	2回	3回	4回	5回	6回
15.9	40.9	22.1	14.1	3.7	3.3

表14　学習塾に行く時間

(%)

3時ごろ	4時ごろ	4時半ごろ	5時ごろ	5時半ごろ	6時ごろ	6時半すぎ
5.7	10.8	20.2	25.1	16.2	13.6	8.4

表15　学習塾から帰宅する時間

(%)

5時ごろ	6時ごろ	7時ごろ	8時ごろ	9時ごろ	10時ごろ	それ以後
8.1	24.2	41.6	14.0	7.6	3.0	1.5

■ 中学受験 IIII

中学受験を志している子どもは、勉強に対する意気込みが違うことは容易に予想できる。詳しいデータは、本調査後半に譲るとして、ここでは、中学受験に対する基礎的なデータを紹介したい。

図10は、私立中学（付属も含めて）の受験希望をたずねたものである。調査をした時期が6月～7月であるにもかかわらず、この時期すでに、13%もの子どもが受験することを決めている。この子どもたちは、おそらく今の段階で、かなり無理な生活を送っていることになる。これを翌年2月まで続けていくのであるから、大変である。

子どもたちの受験希望があっても、その中学校に通えなくては、どうしようもない。図11では、通学可能な私立中学があると仮定し

図10　私立中学の受験希望

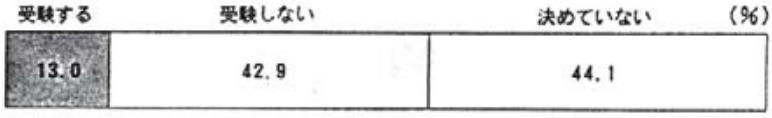


図11　通学可能な私立中学があれば受験を希望するか

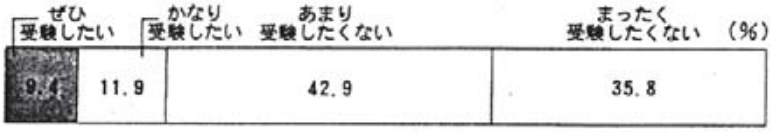
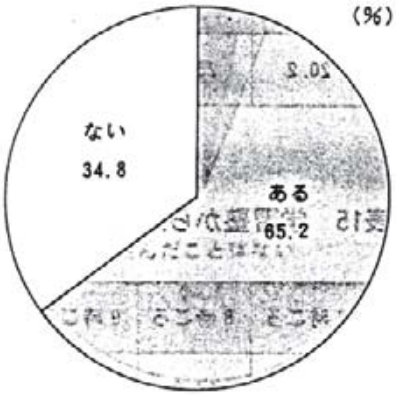


図12　通学可能な私立中学の有無



た上で受験する意志があるかどうかをたずねた結果である。受験したい気持ちがかなりあると答えた子どもは、21%と2割を超す。そして、本当に通学が可能な私立中学があるかどうかは、図12に示した通り、実に65%の割合で、家から通える私立中学があると答えている。本調査が全国調査であるにもかかわらず、65%というのは、かなりの高率である。このような状況であるならば、今後、中学受験をしようとする子どもの割合がさらにふえていくことも予想に難くない。

■子どもたちの体調 IIII

今までみてきたような放課後の様々な勉強の様子は、子どもたちにどのような影響を与えているのだろうか。

表16では、子どもたちに将来、どんな生活ができるようになるかをたずねている。「幸せな家庭をつくる」が「きっと＋たぶん」できると答えた子どもで76%、「よい親になる」が72%と高くなっている。一方、「お金持ちになる」(32%)、「みんなから尊敬される」(38%) という項目は、できそうだとする割合が低くなっている。

このようにみてくると、受験することを志している一部の子を除くと、ほとんどの子どもたちは将来のことを考えて、自分の生活を多少がまんしながら、本音としてはやりたくない勉強をかなりたくさんしているという様子がうかがえる。しかし表10 (P.20) でみた、がまんの項目の中で、子どもの体が必要としている「体を休める時間」をけずってまで勉強しなくてはならないという状況は、子どもの心や体に影響を与えないはずがない。そこで、「朝、なかなか起きられない」「なんとなく疲れやすい」などの項目を用意し、体の調子を子どもたちにたずねてみた。それが図13である。

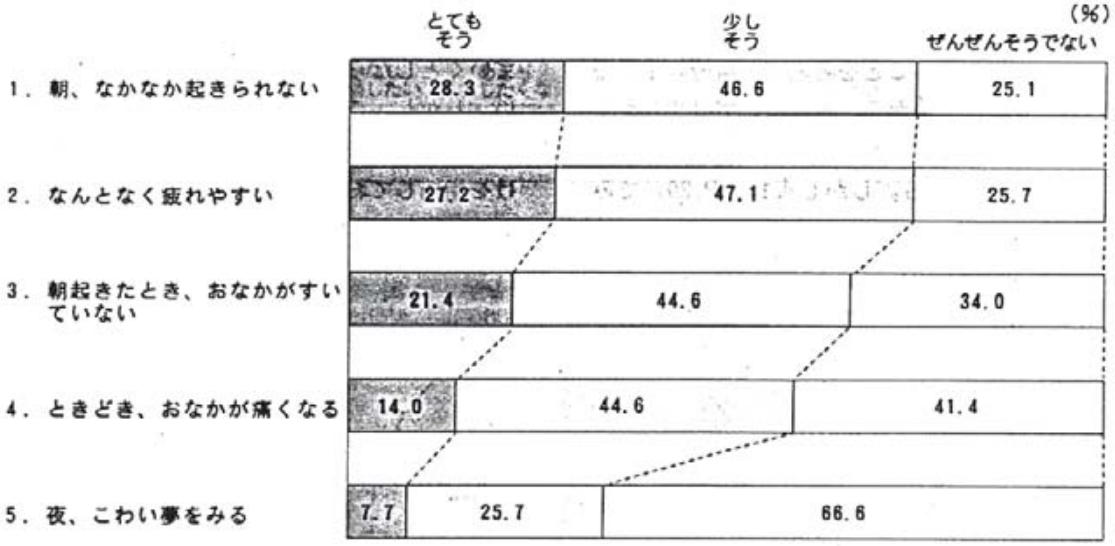
ここでは、「朝、なかなか起きられない」と思っている子が75%、「なんとなく疲れやすい」と思っている子も74%と、全く同じような結果を示した。1日の疲れが、一晩の睡眠だけでは十分にとれず、毎日毎日蓄積されていくとしたら、この結果に驚かざるを得ない。しかし、ここでは、慢性的に疲れている子どもたちがかなり多く存在していることだけを指摘しておきたい。

表16　将来の生活の予測

（%）

	きっと できる	たぶん できる	たぶん できない	ぜったい できない
1．幸せな家庭をつくる	25.1	50.6	20.7	3.6
2．よい親になる	23.5	48.2	23.8	4.5
3．広い家に住む	12.7	38.0	44.4	4.9
4．仕事の面で活躍する	12.4	41.1	42.0	4.5
5．お金持ちになる	11.4	20.2	51.5	16.9
6．みんなから尊敬される	9.3	28.8	52.1	9.8

図13　体の調子



2．校区の特性と家庭学習の状況

前章までに見てきた子どもたちの姿は、全国的な広がりを見せているのか、あるいは、一部の地域だけに限られた現象なのか、ここからは、調査対象となった各学校の地域環境をキーとして、クロスデータを追跡することとした。

ここでいう地域環境とは、調査対象校の周辺がどのような地域であるかを学校側に選ばせ、特徴ある８つの地域に分類したものである（表17）。そのうち、サンプル数の多い上位４つの地域、「古くからの住宅地」「新興住宅地」「農業地域」「商業地域」を中心として、話を進めていくことにする。

■ 家庭での勉強の様子 ||||

表18は、１週間の勉強の日数についての結果である。単純集計の段階で示した「ほとんど毎日勉強する」という実態は、地域による影響をあまり受けないようで、どの地域も、７割前後の子どもたちが、毎日家庭で勉強している。

そして、毎日の勉強の時間であるが(表19)、１日の家庭での勉強時間は、おしなべて１時間にプラスマイナス30分程度といったところで、これも地域による大きな差異は認められない。

各地域の両親の勉強へのかかわり方は、どうだろうか。両親の対応のし方を表20、表21に示している。どの地域の親であっても、自

分の子どもに対する思いは、同じなのだろう、全国的なレベルでみても、どこもみな同じような割合となっており、家庭内での学習の状況だけに限っていうと、全国的にはそれほどの差は見られない。それについては、次の表22、両親の教育への関心度についても同様である。

表17　校区の特性

(%)

	ほとんどの地域がそう	そういう地域も含まれる	ほとんどない	1つ代表させるならば
1．古くからの住宅地	21.8	70.5	7.7	30.2
2．農業地域	18.5	40.8	40.7	20.9
3．新興住宅地	8.9	68.3	22.8	19.8
4．商業地域	2.6	75.6	21.8	15.1
5．工業地域	0.0	24.3	75.7	5.8
6．団地	2.6	64.9	32.5	4.7
7．漁業地域	1.4	8.1	90.5	2.3
8．オフィス街	1.4	35.6	63.0	1.2

表18　ふだんの日の家庭学習 × 校区の特性

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
ほとんどしない	3.2	4.6	2.1	4.7
1週間に1～2日くらいする	10.3	12.1	8.8	5.3
1週間に3～4日くらいする	20.1	18.0	16.1	18.0
ほとんど毎日する	66.4	65.3	73.0	72.0

表19　1日の勉強時間 × 校区の特性

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
ほとんどしない	1.8	1.6	1.2	1.6
30分以下	5.4	7.3	5.5	6.7
30分くらい	16.8	17.3	10.2	18.7
1時間くらい	30.5	29.3	24.1	32.4
1時間半くらい	18.7	19.8	22.5	18.1
2時間くらい	11.8	11.7	16.1	9.8
2時間半くらい	7.4	6.3	10.2	6.7
3時間くらい	3.5	4.7	3.8	4.0
3時間以上	4.1	2.0	6.4	2.0

表20　親に勉強を見てもらうことがあるか × 校区の特性

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
毎日のようにある	5.9	4.1	3.1	2.9
週に何回かある	13.0	15.0	14.3	9.8
たまにある	53.1	53.4	61.5	54.8
ほとんどない	28.0	27.5	21.1	32.5

表21　親にテストを見せるか × 校区の特性

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
必ず見せる	47.4	49.0	47.2	36.5
だいたい見せる	31.1	29.2	30.6	31.9
ときどき見せる	13.5	14.1	13.8	18.7
あまり見せない	5.8	5.3	5.5	10.0
ぜんぜん見せない	2.2	2.4	2.9	2.9

表22　両親の勉強への関心 × 校区の特性

(%)

		古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
父親	とても熱心	9.4	9.4	11.5	8.9
	かなり熱心	27.4	27.4	31.7	29.7
	あまり熱心でない	47.5	47.1	42.7	50.3
	まったく熱心でない	10.4	10.1	9.5	8.9
母親	とても熱心	17.1	13.6	15.5	15.4
	かなり熱心	33.7	38.1	39.4	35.6
	あまり熱心でない	7.0	6.4	4.5	6.0
	まったく熱心でない	2.1	1.0	1.7	0.8

■学習塾・受験と子どもの体 IIII

次に、学習塾や中学受験について見ていくことにする。

まず、学習塾については表23で、近くにある学習塾の数をたずねてみると、その地域が住宅地でも農業地域であっても、学習塾の数はそれほど差がない。全国どこへ行っても学習塾は、同じように存在しているということなのだろう。

そして、表24では学習塾に通っている状況を示したが、実際に学習塾に通っている子どもの割合は、新興住宅地が54%と半数を超える。また、一番低い農業地域も36%と、約3分の1の子どもたちが塾通いをしている。

では、中学受験についてはどうだろう。表25は受験するかどうかをたずねた結果だが、商業地域に、受験をする子どもたちが多く存在していることがわかる。

次の表26～表28までは、勉強に対する意識を探った結果を示した。中学受験に向かう子の多い商業地域については、表26の「わからないところは両親に聞く」「宿題がなくても勉強する」というような項目で数値が高く、逆に、受験希望者の少ない農業地域では数値が低くなっているが、全体的には、どの項目についても地域による大きな差は認められない。

体の調子についてたずねた次の表29でも、地域による差はほとんど見られない。しかし、やはり商業地域の子どもたちは、他の地域の子どもたちと比べると、やや体の不調を訴えているように思える。表29のどの項目でも、他の3地域の割合を上回っている。受験する子どもが多いという理由だけでは、説明はできないにしても、中学受験をすることは、子どもの体の調子に大きな影響を与えていることは明らかである。

表23　地域にある学習塾の数 × 校区の特性

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
ない	11.8	10.6	13.1	16.4
1つ	17.3	16.8	17.4	19.2
2～3こ	41.8	40.4	37.1	36.0
4～5こ	24.3	24.7	27.1	24.9
10こ	3.1	4.9	3.6	1.5
10こ以上	1.7	2.6	1.7	2.0

表24　通塾率 × 校区の特性

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
行っている	41.0	53.5	45.7	36.1
前に行っていた	13.5	12.8	11.5	11.7
行っていない	45.5	33.7	42.8	52.2

表25　中学受験 × 校区の特性

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
受験する	9.5	13.0	22.7	7.7
受験しない	46.4	38.3	36.2	48.0
決めていない	44.1	48.7	41.1	44.3

表26　勉強しているときの様子 × 校区の特性

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
1. わからない問題があったとき両親に聞く	32.6	31.8	36.5	28.8
2. 宿題がないときでも家で他の勉強をする	28.4	28.1	33.5	21.1
3. お母さんに「勉強しなさい」と言われなくても勉強をする	27.6	27.7	28.6	26.7
4. テレビやラジオを聞きながら勉強をする	17.9	17.2	17.9	22.1
5. 自分で計画をたてて勉強している	14.0	14.7	12.4	8.4
6. テストの前にはきちんと勉強をする	11.4	11.1	10.3	8.2

「よくしている」割合

表27　勉強しているとき、がまんしていること × 校区の特性

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
1．読みたいマンガをがまんしている	12.3	12.6	13.1	14.2
2．ねむいのをがまんしている	11.4	10.0	12.6	13.1
3．ぼんやりしていたいのをがまんしている	11.1	12.2	12.4	12.9
4．見たいテレビをがまんしている	6.3	4.9	6.0	3.5
5．友だちと遊ぶのをがまんしている	5.0	7.2	7.1	1.5

「いつもしている」割合

表28　勉強に対する意識 × 校区の特性

(%)

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
1．ぜったい100点をとりたい	43.8	43.0	32.9	45.1
2．勉強をしなくてもよい日があればうれしい	36.6	39.2	34.7	43.5
3．友だちのテストの点が自分よりよいか気になる	27.0	25.2	25.6	21.1
4．勉強ができれば、おとなになって幸せになれる	16.7	14.4	15.7	12.2
5．勉強をするのが好きでない	14.8	15.0	9.3	10.3
6．勉強ができれば、ほしいものを買ってもらえる	8.2	5.8	4.8	6.8
7．学校の勉強がむずかしくてよくわからない	4.1	3.9	1.9	4.6
8．勉強ができれば、少しくらい悪いことをしてもお父さんやお母さんが許してくれる	1.7	1.4	2.1	0.7

「とてもそう思う」割合

表29　体の調子 × 校区の特性

（%）

	古くからの住宅地	新興住宅地	商業地域	農業地域
1．朝、なかなか起きられない	27.7	28.0	29.7	27.3
2．朝起きたとき、おなかがすいていない	22.4	20.0	23.0	20.1
3．なんとなく疲れやすい	27.4	22.4	31.2	29.0
4．ときどき、おなかが痛くなる	13.0	14.8	14.9	14.8
5．夜、こわい夢をみる	7.3	6.6	9.7	9.0

「とてもそう」の割合

3．過教育状況下の子どもたち

■通塾している子・していない子

教育過熱状況の中で、学習塾通いが次第に一般化し、それが子どもの健康をそこない、放課後の生活を圧迫しているという事実を検証するために、通塾の有無を軸に子どもたちの家庭学習の実態をさらに分析していくことにしよう。

まず、表30と表31は、塾通いをしている子としていない子の勉強時間を比較したものである。両者とも１週間のうち「ほとんど毎日勉強する」と答えた者が約７割で大差はなく、１日の家庭での勉強時間にしても同様である。ただ、１日２時間以上勉強すると答えた子の割合が通塾群が35％、非通塾群が19％であり、塾通いの子に、勉強時間の長い子がやや多い傾向にある。

また、表32の勉強をしているときの様子をみると、非通塾群は、ラジオやテレビをつけての「ながら勉強」をしている割合がやや高く、通塾群は「宿題がないときでも自分から課題を見つけて学習したり、自分で計画をたてて勉強する」といった傾向が見られる。しかし、他の項目での差異はほとんどなく、全体的には通塾しているかいないかで、勉強の様子が大きく異なるわけではないようである。

次に両親の勉強に対する関心の高さを比べてみよう。表33によれば、通塾群の両親は、非通塾群に比べ、勉強への関心が高く、とくに母親は顕著である。そのため表34が示すように通塾群の母親は、「宿題をしたの」「よい成績をとりなさい」「テレビを見ないで勉強しなさい」などといったことを子どもによく言っており、常に勉強をするように熱心に呼びかけているようである。

また、表35の将来の生活予想でも、通塾群

の子のほうが「経済面での成功」「周囲の人からの尊敬」「よい親になる」割合が、いくぶん高いことがわかる。

さらに、表36の示す体の不調の訴えを見てみると、両者には大きな差が認められず、塾通いをすると体の調子が悪くなるといった傾向は見られないものの、「朝、なかなか起きられない」「朝、おなかがすいていない」など、朝に多少不調感を訴える子が見られる程度であった。

表30　ふだんの日の家庭学習 × 通塾

(%)

	塾に行っている	塾に行っていない
ほとんどしない	3.2	4.5
1週間に1～2日くらいする	8.8	9.9
1週間に3～4日くらいする	20.3	17.0
ほとんど毎日する	67.7	68.6

表31　1日の勉強時間 × 通塾

(%)

	塾に行っている		塾に行っていない
ほとんどしない	1.0		2.0
30分以下	4.8		7.5
30分くらい	13.0	<	20.1
1時間くらい	26.7		31.2
1時間半くらい	19.1		20.6
2時間くらい	12.5		10.9
2時間半くらい	9.8		4.9
3時間くらい	6.8	>	1.4
3時間以上	6.3	>	1.4

表32　勉強しているときの様子 × 通塾

（%）

	塾に行っている		塾に行っていない
1．わからない問題があったとき両親に聞く	75.7		75.5
2．お母さんに「勉強しなさい」と言われなくても勉強をする	69.0		68.2
3．宿題がないときでも家で他の勉強をする	68.2	>	55.9
4．テストの前にはきちんと勉強をする	48.5		47.7
5．テレビやラジオを聞きながら勉強をする	46.1	<	52.9
6．自分で計画をたてて勉強している	37.4		32.7

「よく」＋「ときどき」している割合

表33　両親の勉強への関心 × 通塾

（%）

	塾に行っている		塾に行っていない
お父さん	42.4	>	33.2
お母さん	58.2	>	43.6

「とても」＋「かなり」熱心の割合

表34　母親からよく言われること × 通塾

(%)

	塾に行っている		塾に行っていない
1．宿題をしたの	51.2		47.2
2．テレビを見ないで勉強しなさい	40.9	>	33.9
3．先生の話をよく聞きなさい	37.5	>	31.7
4．よい成績をとりなさい	25.6	>	16.0
5．テストの点数がよくないのはなまけているから	18.1		11.6

「とても」＋「わりと」よく言う　割合

表35　将来の生活の予測 × 通塾

(%)

	塾に行っている		塾に行っていない
1．幸せな家庭をつくる	76.6		74.7
2．よい親になる	74.1	>	67.6
3．仕事の面で活躍する	56.5	>	49.4
4．広い家に住む	53.3	>	46.5
5．みんなから尊敬される	42.1	>	35.5
6．お金持ちになる	35.3	>	27.9

「きっと」＋「たぶん」できる割合

表36　体の調子 × 通塾

(%)

	塾に行っている		塾に行っていない
1．朝、なかなか起きられない	29.8		26.2
2．なんとなく疲れやすい	27.8		26.7
3．朝起きたとき、おなかがすいていない	23.8	>	17.3
4．ときどき、おなかが痛くなる	13.0		14.4
5．夜、こわい夢をみる	8.9		7.1

「とてもそう」の割合

■ 中学受験の影響 IIII

先にも述べた教育過熱状況の中で、本サンプルの通塾率が5割近くにも及んでいるとはいっても、通塾はある意味で生活の一部となっており、通塾群と非通塾群との間には、その生活上に一般に思われているほどの差が生じているとはいえないようである。しかし、通塾群の中には進学を目的とする者と、補習を目的にする者とが含まれており、とくに進学を目的とする者が、現在の教育過熱ブームをもたらしたともいわれているので、ここからは「私立中学の受験」（付属も含めて）を軸に、さらに分析を進めてみることにしたい。

今回の全国調査では、私立中学を受験する子は、全体の13%にのぼり、塾通いの一般化とともに、中学受験の波も、広がりを見せている傾向にあるといえよう。したがって、ここからは中学受験する子としない子との放課後の生活と家庭学習を明らかにしていくことにしよう。

まず表37をご覧いただこう。これは、1日の家庭での勉強時間を示しているが、受験生は2時間以上勉強する子が57%で、受験しない子の24%を大幅に上回っている。。しかも、塾で勉強する時間を除いても3時間以上も勉強するモーレツな子が受験生の16%にものぼり、驚かされる結果であった。

また、表38が示すように、月曜日から土曜日までの通塾回数を見てみると、受験しない子は、週1回から3回までに9割近くが集中しており、平均では2.4回ほどであった。これに対し、受験生は週4回以上も塾に通う子が4割もおり、平均でも3.3回と1週間の半分が塾通いという計算になる。しかも6年生ともなれば、日曜日にテストや補習を実施する学習塾も少なくないことから、受験生は、一層の学習塾づけとなっていると考えられる。

そこで今度は、学習塾からの帰宅時刻や就寝時刻を比較してみよう。まず、表39を見ると、受験しない子は6時から7時前後に全体の76%が帰宅しているが、受験生は6時台か

ら10時台までに分散しており、とくに顕著なのが9時ごろ、もしくはそれ以降に帰宅する子が受験生の32%にも及ぶ事実である。これは、受験しない子の6%に比べて圧倒的に高い割合を示している。さらに、帰宅時刻を平均してみると、受験しない子の平均帰宅時刻は約6時50分で受験生のおよそ8時に比べて、1時間10分もの差が認められる。つまり、両者とも学習塾で勉強を開始する時刻がほぼ同じであることから、受験生は受験しない子よりも1時間以上も長く学習塾で勉強していることになる。

そのため、表40の示す通り、受験生の就寝時刻は遅くなり、冒頭で述べた全国平均の10時17分より大はばに遅くなり、11時以降の就寝者が受験生全体の42%にも及んでいる。そして、成人なみに12時ごろ眠りにつく子も9%もいることがわかる。いくら中学受験のためとはいっても、このように遅い就寝時刻を小学生が長期にわたって続けていいはずがなく、大いに疑問が残る結果であった。

次に、両親と受験との関係について見ていこう。表41は、両親の勉強への関心を示したものだが、受験生の両親は子どもの勉強に対して熱心な割合がかなり高く、受験しない子の親と比較した場合、父親が熱心である割合がかなり高いことが大きな特徴となっている。これは、先に示した通塾程度ならば母親だけ

表37　1日の勉強時間 × 受験

(%)

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
ほとんどしない	0.8		2.4
30分以下	1.9	<	6.9
30分くらい	9.0	<	18.5
1時間くらい	16.6	<	28.7
1時間半くらい	15.2		20.0
2時間くらい	14.4		10.8
2時間半くらい	14.1	>	7.4
3時間くらい	12.0	>	2.8
3時間以上	16.0	>	2.5

が熱心であればよいのかもしれないが、私立中学受験というレベルにまでくると、両親がそろって子どもの勉強に熱心に取り組まねばならないということであろう。さらに、表42の母親からよく言われることだけを取り上げてみても、受験生のほうが「テレビを見ないで勉強しなさい」「よい成績をとりなさい」などをはじめとして、多くのことを母親から言われていることがわかり、受験生は親の期待やプレッシャーを背に学習に向かっているようである。

そこで、今度はこうした背景をもとに、受験生たちがどんな気持ちで受験勉強に取り組んでいるのかを探ってみることにしよう。

まず、表43が示すように受験しない子はテレビやラジオを見聞きしての「ながら勉強」をする割合が高く、いわゆる集中力を欠いた状態で勉強している傾向にあり、これに対して受験生は自分で計画をたてて勉強に取り組み、宿題がないときでも自発的に勉強している割合が高いことがわかる。そうした反面、本来はあまり好きでない受験勉強をがまんしてしているため、表44のように「睡眠」「マンガ」「テレビ」「友だちとの遊び」をかなりがまんして生活していると答えている。こうしたがまんや努力は表45に示したように、勉強に対する目的が受験と、はっきりしているからであると考えられよう。つまり、受験生

表38　月～土曜までに学習塾に行っている回数 × 受験

(%)

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
1回	6.5	<	18.3
2回	22.6	<	47.5
3回	31.3	>	20.7
4回	26.1	>	8.7
5回	6.1		2.8
6回	7.4	>	2.0
平均	(3.25)		(2.36)

はよい中学や高校へ行くため、または将来よい職業や幸せな生活を送るためといった明確な目的をもっているので、多くのがまんを強いられながらも、前向きに勉強に取り組めるのであろう。

そのため表46が示す通り、受験生たちの未来は、受験しない子どもたちに比べて「仕事の面」や「経済的な面」「尊敬されるといった面」を中心に、明るく展望されていることがわかる。

しかし、こうした反面、多くのがまんを強いられながらも、長時間の受験勉強を継続していく生活のために、受験生の体調は必ずしもよい状態ではないようである。表47によれば、受験生の体調は受験しない子に比べておもわしくない傾向を示しており、「なんとなく疲れやすい」が37%、「朝、なかなか起きられない」が36%、「ときどき、おなかが痛くなる」が18%という高い割合を示している。つまり、ハードな受験勉強には表面上がまんして耐えてはいるものの、実際は体の調子や精神的な面での悩みを多くかかえて生活しているようである。

表39　学習塾から帰宅する時間 × 受験

(%)

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
5時ごろ	2.2	<	8.6
6時ごろ	10.5	<	29.9
7時ごろ	32.6	<	45.7
8時ごろ	22.3	>	9.5
9時ごろ	16.2	>	4.9
10時ごろ	12.7	>	0.7
それ以後	3.5		0.7
平　均	(7時56分)		(6時46分)

表40　就寝時間 × 受験

（%）

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
9時30分	5.3	<	11.6
10時	15.2	<	26.2
10時30分	13.9	<	19.4
11時	18.2	>	12.7
11時30分	15.0	>	5.7
12時	8.8	>	2.1

表41　両親の勉強への関心 × 受験

（%）

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
お父さん	52.7	>	33.5
お母さん	65.8	>	57.6

「とても」＋「かなり」熱心の割合

表42　母親からよく言われること × 受験

（%）

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
1．宿題をしたの	47.7		46.8
2．テレビを見ないで勉強しなさい	43.6	>	33.2
3．先生の話をよく聞きなさい	40.4	>	32.0
4．よい成績をとりなさい	33.3	>	16.7
5．テストの点数がよくないのはなまけているから	22.0	>	11.0

「とても」＋「わりと」よく言う割合

表43　勉強しているときの様子 × 受験

（%）

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
1．宿題がないときでも家で他の勉強をする	78.5	>	58.1
2．わからない問題があったとき両親に聞く	73.5		77.6
3．お母さんに「勉強しなさい」と言われなくても勉強をする	73.4	>	68.5
4．テストの前にはきちんと勉強をする	50.4		47.7
5．自分で計画をたてて勉強している	48.7	>	31.5
6．テレビやラジオを聞きながら勉強をする	31.4	<	53.8

「よく」＋「ときどき」している割合

表44　勉強しているとき、がまんしていること × 受験

(%)

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
1．ねむいのをがまんしている	57.3	>	37.6
2．ぼんやりしていたいのをがまんしている	52.8	>	36.9
3．読みたいマンガをがまんしている	49.3	>	33.1
4．見たいテレビをがまんしている	39.0	>	18.6
5．友だちと遊ぶのをがまんしている	36.9	>	13.8

「いつも」＋「かなり」している割合

表45　勉強する目的 × 受験

(%)

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
1．中学受験のため	73.6	>	3.2
2．行きたい高校に行くため	62.1	>	39.5
3．将来つきたい仕事につくため	59.9	>	44.5
4．将来幸せな生活を送るため	59.3	>	42.2
5．友だちに負けたくないから	55.9	>	35.0
6．両親にほめられたいから	28.0		24.6

「とても」＋「かなり」そうの割合

表46　将来の生活の予測 × 受験

（%）

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
1．幸せな家庭をつくる	80.1		77.2
2．よい親になる	79.1	>	73.4
3．仕事の面で活躍する	65.9	>	50.1
4．広い家に住む	58.2	>	47.5
5．みんなから尊敬される	48.2	>	36.5
6．お金持ちになる	37.1	>	29.8

「きっと」＋「たぶん」できる割合

表47　体の調子 × 受験

（%）

	私立中学を受験する		私立中学を受験しない
1．なんとなく疲れやすい	37.2	>	24.0
2．朝、なかなか起きられない	35.8	>	27.9
3．朝起きたとき、おなかがすいていない	24.3	<	29.4
4．ときどき、おなかが痛くなる	17.6		13.1
5．夜、こわい夢をみる	10.1		6.2

「とてもそう」の割合

■ 成績の良し悪しと家庭学習 IIII

これまで見できたように、今回の調査では私立中学を受験する子が13%、受験したくても近くに進学可能な私立中学を見いだせない子が35%、また仮に、進学可能な私立中学があったとしても、受験しない子どもたちは8割近くも見うけられる。しかし現在、こうした私立中学受験に無関係な子どもたちも4年後には、そのほとんどが高校受験という事態に直面せざるをえない。その際には、成績の良し悪しが厳しく問われるわけである。

これまで、「モノグラフ・小学生ナウ」では、子どもたちの中で学業成績の良し悪しが子どもの自己像を含めて、かなりすべての部分に大きな意味をもち、時には、将来像にもかげを落としていると調査のたびに見いだし、くり返し指摘してきたが、それらの調査の多くは首都圏を中心とした限られた地域のものであったので、今回、あらためて全国的な規模で、この点を検証していくことにしよう。

（今回は、学業成績を代表させる意味で、算数の成績の良し悪しをキーにして分析をしていることをことわっておく。）

まず、表48をご覧いただこう。成績上位群は、「ほとんど毎日勉強する」子が8割で、

表48　1日の勉強時間 × 算数の成績

（%）

		トップのほう		まん中くらい		うしろのほう
一週間のうち	ほとんど毎日する	80.0	>	70.1	>	48.9
一日の勉強時間	ほとんどしない	0.9		1.2		6.9
	30分以下	6.4		4.9		10.9
	30分くらい	14.5		15.9		20.6
	1時間くらい	25.5		29.1		31.0
	1時間半くらい	15.9		23.5		13.5
	2時間くらい	11.4		11.2		7.1
	2時間半くらい	7.7		7.3		5.3
	3時間くらい	6.8		3.7		2.0
	3時間以上	10.9		3.2		2.7

1日2時間以上勉強する子が37%もいるのに対し、成績下位群は、毎日勉強すると答えた割合が5割に達せず、1日2時間以上勉強する子も17%であった。

しかも、表49、表50が示すように、成績上位群は目的をもって前向きに自発的な学習に取り組んでいるのに対し、下位群は、はっきりとした目的もないまま、ただなんとなく勉強に向かっているようである。そのため表51が示すような「学校の勉強がわからない」と

表49　勉強しているときの様子 × 算数の成績

(%)

	トップのほう		まん中くらい		うしろのほう
1. お母さんに「勉強しなさい」と言われなくても勉強をする	80.0	>	70.7	>	51.0
2. 宿題がないときでも家で他の勉強をする	71.8	>	66.0	>	42.3
3. わからない問題があったとき両親に聞く	66.5	<	78.5	>	70.1
4. 自分で計画をたてて勉強をしている	44.8	>	35.9	>	22.1
5. テストの前にはきちんと勉強をする	43.8	<	54.4	>	32.4
6. テレビやラジオを聞きながら勉強をする	41.3	<	49.6		52.1

「よく」＋「ときどき」している割合

表50　勉強する目的 × 算数の成績

(%)

	トップのほう		まん中くらい		うしろのほう
1. 将来つきたい仕事につくため	62.4	>	47.2	>	40.8
2. 友だちに負けたくないから	56.8	>	41.1	>	28.5
3. 行きたい高校に行くため	56.4	>	44.3	>	31.5
4. 将来幸せな生活を送るため	52.4	>	45.5		49.0
5. 中学受験のため	31.2	>	15.7	>	9.5
6. 両親にほめられたいから	29.4		28.8		26.7

「とても」＋「かなり」そうの割合

答える子が47%にものぼってしまうのであろう。加えて、表52が示す「学校が楽しい」という割合も6割に満たない結果につながってしまうようである。

さらに、表53の将来の生活に対しても、成績上位群・中位群に比べて、下位群の子どもたちは自分の将来を暗く、悲観的に見る傾向が強く、あらためて成績のもつ意味の大きさに驚かされる。

そうした理由からであろう、表54が示すよ

表51　勉強に対する意識 × 算数の成績

(%)

	トップのほう		まん中くらい		うしろのほう
1．ぜったい100点をとりたい	82.6	>	74.1	>	62.4
2．友だちのテストの点が自分よりよいか気になる	60.0		56.4	>	50.8
3．勉強をしなくてもよい日があればうれしい	59.6	<	68.6		67.2
4．勉強ができれば、おとなになって幸せになれる	47.5	>	38.2		36.6
5．勉強をするのが好きでない	35.8	<	44.9	<	60.6
6．学校の勉強がむずかしくてよくわからない	6.8	<	13.9	<	47.2

「とても」＋「かなり」そう思う割合

表52　学校が楽しいか × 算数の成績

(%)

	トップのほう	まん中くらい	うしろのほう
とても楽しい	43.9	33.8	25.0
わりと楽しい	36.5	45.3	34.6
どちらでもない	9.6	14.9	21.2
あまり楽しくない	4.1	4.5	11.7
ぜんぜん楽しくない	5.9	1.5	7.5

うに、成績下位群の子どもたちは「なんとなく疲れやすい」31%、「朝、なかなか起きられない」36%、「ときどき、おなかが痛くなる」20%というぐあいに、かなり高い割合で体の変調を訴える傾向を示している。しかも、このような成績下位群の子どもたちは、先の表11（P.21）に示した通り、成績上位群の子の7%の2倍以上上回る15%もいる事実から、勉強によって自信をつけていく子がわずかであり、自信をなくして悲観的な将来を描き、勉強から逃避行動に出ていく子のほうがはるかに多い傾向にあることがうかがえる。

つまり、本来勉強によって幸福な生活を送れるような社会や教育が望ましいとするなら

表53　将来の生活の予測 × 算数の成績

(%)

	トップのほう		まん中くらい		うしろのほう
1．幸せな家庭をつくる	81.9		79.7	>	61.5
2．よい親になる	81.8		76.5	>	52.4
3．仕事の面で活躍する	77.2	>	57.0	>	33.0
4．広い家に住む	66.0	>	52.5	>	40.5
5．みんなから尊敬される	44.0		40.2	>	22.6
6．お金持ちになる	52.3	>	30.7	>	23.7

「きっと」＋「たぶん」できる割合

ば、どうやら日本の社会は全国的な規模で、勉強によって苦しむ子どもたちを数多くつくりあげているようで、その代表が、中学受験のために、かなり多くのがまんを強いられている子どもたちと、学業成績がおもわしくないために、悲観的な生活をよぎなくされている子どもたちであろう。

言いかえれば、勉強というスケールの中で苦しむ子が二極化していく傾向にあるということであろう。

表54　体の調子 × 算数の成績

(%)

	トップのほう	まん中くらい		うしろのほう
1．なんとなく疲れやすい	26.2	26.0	<	31.4
2．朝、なかなか起きられない	24.0	28.2	<	36.4
3．朝起きたとき、おなかがすいていない	19.5	21.2		24.7
4．ときどき、おなかが痛くなる	15.1	13.1	<	20.1
5．夜、こわい夢をみる	5.5	8.2		10.5

「とてもそう」の割合

まとめに代えて

こうしてみてくると、地域差のない全国的教育過熱状況の中、子どもたちは親の期待に応えるべく、前向きに学習しているようであったが、一方では中学受験というハードな勉強のために、体の不調を訴える子がおり、また一方では、勉強に自信が持てずに暗い未来を予感してやる気を喪失し、やはり体の不調を訴える子が少なくないという事実がうきぼりにされてきた。つまり、今後一層通塾化、受験化が進むと、こうした二極化の傾向は深刻となり、子どもたちが安心して学習や生活を続けていくことが困難になっていくと予想されよう。

本来、この時期の子どもたちは十分な遊びと睡眠と様々な人間関係をベースにして、バランスのよい生活や学習を展開していく中でゆっくりと成長していくことが望ましいはずである。しかし、どうやら現在の教育過熱ブームがもたらしたものは、子どもたちから子どもらしさといわれる「万能感」「勢い」「未来志向」といったものを様々なかたちで失わせていく方向に働いているようで、さしずめ、子ども時代の喪失をみるようである。

確かに、現在の通塾化や受験化の傾向はしばらく続くであろうが、子どもの人数が確実に減少してきている日本の社会で、今のような１点を争うほどのしれつな受験勉強は、意味をもたなくなってくるはずである。生涯学習社会が進行していく中で、今後日本の子どもたちに求められるものは、一時的な学業成績の良し悪しではなく、本当の意味での自分らしさの発見、活用ではないだろうか。